

力添えて県立博物館に保存してもらった。新旧の石碑が沖縄の医療史の足跡を刻むと共に、後進の者の道しるべ・励みになることを願っている。

※ 表1・図2・図3の資料は「沖縄医生教習所碑再建記念誌」より転載させていただきました。

例会抄録

検梅医・松山不苦庵の足跡

中西 淳 朗

演者は平成三年一月の例会において、『横浜医学史細見』と題して、基本的な課題であるのに研究されていない問題について述べた。

その中で、松山不苦庵について述べたが、非常に不十分であった(日本医史学雑誌第三七巻三号二一九頁)ので、今回その後の研究成果について発表した。

一、不苦庵とよく混同される松山棟庵の略歴については、明治六年の自筆履歴書によるのが最も正確であるが、この写真が『図説・慶応義塾百年小史』に収載されていると云うものの、この本は一般的でないので今回、神谷昭典著『日本近

代医学の定立』と『慶応義塾百年史・上巻』を必読文献に加えた。

一、不苦庵が提出したと考えられる経歴書(「神奈川県史料・第八巻」)を改めて通覧すると、彼の旧所属は館林藩となっており『横浜軍陣病院の日記』等に記されている前橋藩ではない点が疑点を生む。そして最近まで読み落していた項に、彼のまたの名が藤原義定であることがあげられる。

そこで館林市図書館に「松山氏という藩医」の調査を依頼したが、松山氏は足軽に一名を数えるのみだとの返答をうけた。

一、松山不苦庵の経歴に補足すべき点があるのではないかと、再調査したところ新たに次の三点を発見した。

イ、実地試験合格の件、『横浜市史・資料編二十』任免報告類第七条に、左記の如き「海軍医官の証書」が収載されていた。

「拙者共今日病院ニ於テ医術試ノタメ病婦ヲ検査為致候処
医師ニウトン(Newton)氏留守中代勤トシテ松山不苦庵適當
致候此段証明致候以上

千八百七年第十月六日

英海軍医官 ヘンリーハッドウラ

(Henry Hadlow)

合衆国海軍医官助役

セーアールトライオン

この証書につづいて不苦庵の昇進催促状もあり、さらに辞

令の写ものっている。

「ニートン帰港迄ノ処病院院長相勤可申事

庚午九月廿六日御達ニ成」

即ち、明治三年秋は、ニートンは長崎仮病院運営のため横濱不在のこと多く、そのための不苦庵受験であった。

ロ、病院医師松山某ヲ兵庫病院へ差遣度儀「ニウトン」氏ヨリ申立書並返書

不苦庵がニートンの代診医師に合格したことを好機ととらえ、ニートンは長崎、横濱、兵庫の三港検梅を英医派で独占しようとしたが、神奈川県から「差支筋出来」承知出来ない旨の返事となった。(明細は「神奈川県史料第五巻交際編」明治三年二三〇頁)

ハ、海軍病院移籍の件

ニートンは兵庫の梅毒病院設立構想も破れ、長崎仮病院の運営も不満の中、明治四年五月廿四日長崎で死亡した。これにより松山不苦庵は院内で孤立したらしく、同年六月初、芝・魚籃坂西側に新設の海軍病院へ移籍を申し出たらしい。これを示唆する文書の写が防衛研究所図書館に残っていた。

(明治四年公文類纂十二一三六、一七四一―一七七七)

口語体で略記する。

六月四日、前橋藩より兵部省へ

お呼出の松山富久庵は一兩日の処病気で今日出頭出来ません。

六月五日、前橋藩より兵部省へ

昨日ご返事申上げましたが、当藩の富久庵は神奈川県出向の者でございます。

六月某日、神奈川県より兵部省へ

英国医ニートンが病没しまして梅毒病院は無人ですの不苦庵が海軍病院へ移つては困ります。お断りします。

六月十日、兵部省より海軍病院へ

神奈川県へ掛合いましたが、別紙の様に断られましたのでご通知します。

以上の様に、明治四年頃は前橋藩の溜池上邸では名前だけは知られていたという存在になっているが、仮病訂正の指示をする人物もいた。やはり不苦庵は前橋藩(旧川越藩)の藩医であった。館林藩は詐称であろう。

一、右の結果をふまえ、白土竜峯編『今世医家人名録西部・文政三年』を調べたところ、川越藩々医で本道、外科、瘰癧を診る、松山良庵を見出した。定府藩医である。

そこで川越市立図書館を訪問し、松平家文書已給帳、天保十二年松平齐典家中分限帳、松平家文書子給帳を閲覧させていたゞき、良庵と別の系と考えられる藩医松山氏(寿軒、涛村)を見出したが、いずれも不苦庵との関係は未だ見出していない。

一、松山不苦庵は、明治四年八月廿六日、大阪府へ御用有之出張といつて横濱を去つていったが、本当に大阪へ行つたかが疑問であった。今井忠宗著『我国検徴駆徴の端緒千葉医

惠誌、大正四年五月』の三八三頁に、『明治十二年頃まで大阪府病院の梅毒科長として、松山義定と名のり勤めたり』と記されていることを改めて見出した。

さらに、昭和八年五月発刊された須田菊二著『松島遊廓沿革誌 全』（非売品）の二二二頁に、『驅梅院が初めて出来、横浜から松山不苦庵（義定）が院長として赴任した』と記されている。氏名をあげた文献はこれ以外に存在しないようである。これでやっと不苦庵が大阪の松島遊廓内に作られた驅梅院（須田氏の著書に図あり）に赴任したことが確定したのである。

しかし、不苦庵の出生、死亡の年もなお不明である。

（平成十一年十月例会）

古写本「長崎吉雄先生秘伝」について

中西 淳朗

今回報告した古写本の題簽は、長崎の吉雄先生の秘伝と読むようである。内容は梅毒治療の処方集であった。一九九八年に入手した。

大きさは縦二四・〇センチ、横一六・八センチ。和紙二十丁四〇頁のヒモ綴本である。

何時書き写したかは「後がき」ではつきりしており、文政七年申とあるので一八二四年である。本文の書き手は不明であるが、字は下手で誤字も多く専門医師とは思えない。

この写本を買った人は第一頁にサインをしており、出羽庄内鶴ヶ岡七日町の佐藤茂七と読める。入手したのは天保八年即ち、一八三七年で酉年の三月となっている。このサインの脇に売り主の印が押しあり、同じ鶴ヶ岡七日町の三国屋という商人である。商印は丸に一引竜紋となっており上州の出身を想像せしめる。

この他、表紙ウラに日下部竹藏という人のサインがあり、第二頁の『天保九年二月夜』という記入が、竹藏の書体と似ている。鶴岡には幕末に日下部姓の医師が断罪されている（丁卯の大獄）ので、その一族かも知れない。

佐藤茂七は実在の人と考えられ、天保十年の七日町絵図面にその名を見出すことが出来る。七日町を東西に貫く道は藩政時代からの旧道で、その左右には羽黒山へ参詣する人々のための宿屋が散在していた。文政八年の人別帳によれば宿屋のうち、旅籠屋十五軒に対し、飯盛女をおく下旅籠屋が二五軒もあり、飯盛女は一〇六人いた。このような状況は幕末まで続いている。茂七は塗師であるが、どうやら下旅籠屋の知り合いが多かったと思われる。というのも天保十年のこの町ではやっと町医一名を数えるのみであった点を考えると、非公認女郎に蔭で薬情報の仲立ちをする人間がいてもおかしくない。茂七はそんな男ではなかったらうか。

さて、この古写本のタイトルを信するならば、長崎の吉雄耕牛一門の流儀が見出せると考えた。今から一五〇年以上前の梅毒治療の極めつけ、ズブリマート・昇朧が出てこなくて